毎月一回15日発行 昭和52年5月15日発行・第88号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

5月号

12 Martiroj de Kotoku-Afero, la Granda ribelo
1910-1911 en Japanio.
Pendmortigitaj 24 an de Jan., 1911.

Libertaire Vol., VIII. No. 6

無 政 府 主 義 誌

昭和52年5月15日発行第88号 昭和45年9月4日第3種郵便特認可 リベルテール定価一〇〇円(郵便料共)

人類更生の大道アナキズム研究書

何が私をこうさせたか　金子ふみ子獄中手記決定版 2,400円
金子ふみ子歌集　解説：瀬戸内晴美 500円
権藤成卿著作集2 農村自救論・日本農制史談 3,000円
大杉栄秘録〈増補〉堀保子ほか19氏著 1,000円
無政府主義論　エンリコ・マラテスタ著 300円
ディナミック　石川三四郎個人紙復刻版 3,000円
アナキスト革命　ジョージ・バレット著 150円
西洋社会主義運動史　石川三四郎著 1,000円
ロシア革命の批判　A・ベルクマン著 200円
黒色青年　黒色青年連盟機関紙　大正15年創刊号より昭和6年終刊号まで復刻 2,500円
黒色戦線　アナキズム文芸思想誌　第1次　昭和4年創刊号より終刊号まで復刻 5,000円
労働運動　第5次　昭和2年復刻号より終刊号復刻〈近刊〉
差別とアナキズム／水平社とアナ・ボル抗争史　宮崎晃著 1,600円
権藤成卿著作集3 君民共治論 3,000円
マラテスタ著作集I 無支配への道 300円
アナキズムのＡＢＣ　ベルクマン著 100円
石川三四郎選集I 古事記神話の新研究 2,200円
〈解説・石川三四郎論　大沢正道〉

〒372 群馬県伊勢崎市中町和田　電　0270-24-0776
郵便振替口座　宇都宮　11015 黒色戦線社　大島英三郎
東京事務所　電　03-735-1246
〒144 東京都大田区西蒲田7丁目61番8号エンリコビル4階
国鉄蒲田駅西口下車，蒲田銀座アーケード街歩いて5分突き当り左隣，毎月第2・第4日曜午後1時より4時共学読書会，初心者に公開

販売書店／〈東京〉神田ウニタ・新宿模索舎・吉祥寺ウニタ・早稲田文献堂〈京都〉中区寺町二条上・三月書房

■ リベルテール　Le Libertaire
■ 1977年5月15日発行　Vol., VIII No. 6
■ 編集兼発行者　三浦精一
■ 発行所　東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行　振替　東京133830番　三浦精一

今月のことば

欲借政治能力（ユエ ツァオ ジェン ジー ノン リー）
以達到社會（イー ダー タオ シェ フイ）
主義之目的（ツー イー ツー ムー ディー）
是（シー）
半面的社會主義（パン ミェン ダー シェ フイ ツー イー）

劉師復（Liú shī fù 一八八四～一九一五年）

政治力で社会主義の目的を達成しようとするのは
実に半分の社会主義だ。

目次

巻頭言
労働価値説と協同体 …… 大門一樹 2
進化について …… 三浦精一 4
中国の若い同志からの手紙 …… チョイ・ハクキン 8
中国無政府主義試論 (2) …… 志摩達夫 10
一波万波 …… 劉師復
（平井貞二さん清水君より） …… 14
海外だより …… 15
ムーレイ夫妻／スペインのアナーキズム／
野火（江藤編） …… 17
台湾・在日台湾人問題に関心を

巻頭言

時事寸言

一九七七年五月六日、農民レジスタンスのシンボルだった成田空港の二つの塔が撤去された。四千人もの機動隊員を動員して、農民や学生たちの虚をつたものだった。

国際空港を何故成田にしなければならないかについて全国民を納得させるにたる理由は一体あったのか無かったのか。羽田が手狭になったというのなら、もっと埋立てて拡大してもよかったのではないか。成田にするための政治家の暗躍、地主やブローカーの土地ころがし、裏から裏へ流れてゆく金で肥ったのは一体誰だ。こうしたことのために、どれだけの農民が犠牲になったか。

最後まで反対派として残った農民だけが犠牲者ではない。だまされたり、あきらめたりして土地を手放した者たちが、一体どうなっているのだろうか。土地と農具を手放して、少しばかりの保障金をもらったところで、水をはなれた魚がどうして生きて行けるか。少しの例外はあるにしても結局良いことはないのが事実だろう。金で解決できることとは違うのだ。一部の政治家や資本家の懐を肥やすために、国家の名において多数農民を犠牲にしたのだ。これが資本主義国家の政治だ。全国からの支援も行われ、農民は良く戦った。マルクス主義の解釈という一寸したことでよく内ゲバをやる中核もよく応援したようだ。中革も革マルも共に権力主義者だから、ヘゲモニーのために争そうのかも知れないが、当面の共通の敵は現政権のはずだから、この私腹をこやす者共の方にゲバるべきではないのか。鉄塔はなくなっても戦は終っていない。

×

石原長官がミナマタ病患者の面会要求を暴力だとしてテニスをやりに行ったとか。

権力に保護された資本家の私欲の犠牲となって、再起不能なまでの被害を受けた、よるべない地域住民が、せめてもの嘆願のための面会要求である。長官という権力の座はこうした環境汚染についての責任ある地位ではないのか。こうした責務をはたすためでなく、単なる名誉のために長官になったのか。

大臣や長官になると皆オメデトーと祝う。どうもおかしい。日本全国の公害になやむ国民、インフレに苦しむ国民、出稼ぎまでせねば食えない農民、こうした国民の大部分の者を欺瞞した公約で議員になり、大臣になって一体どのような責任ある解決を打ち出したか。真に責任感があったら、死んでも死に切れないような重荷を負うことではないか。だが実際はチャランポランの答弁で済んでいる。

ミナマタ病患者の面会要求など、初めから当然のことではないか。それに心理的な圧力を感じるというのは、まだ官僚から答弁の文句を教わっていなかったからか。さりとはお粗末な。

（三浦精一）

労働価値説と協同体

大門一樹

社会的費用の発想

きちがいじみた自動車日本、アメリカの経済学者ポール・サムエルソンは「まともなアメリカ人だったら、東京の町で一カ月間生活していたら、完全に頭がおかしくなる」と言ったと言う。正常な交通状況を保つ車台数の数倍の車を生産し、しかもそれが一度も公けの環境会議でこの過剰生産が問題にならなかったという、ふしぎな国、日本である。自動車業界と政府が癒着して、政府に巨額の投資をさせて道路をつくらせ、マイカー時代とはやしたて国民に車を買わせ、日本じゅうを車だらけにした。

しかしこの過剰自動車からの被害に対して当然に反発が出る。そうした社会的気流のなかで、「自動車の社会的費用」を問題にする人も出てきている。工場内での商品の生産にどれだけコストがかかったか、それによって自動車の値段がきめられ売買されて、それでよしとするのでなく、それが第三者や社会全般に被害を与え、しかもそのことに対しては殆ど代価を支払わなくてもよいという自由社会のあり方を改めよ、というのである。

第三者あるいは社会全体に及ぼす悪影響のうち、迷惑を発生させる者が負担していない部分を社会的費用とよんでいるが、宇沢弘文氏は『自動車の社会的費用』（岩波新書七四年版）で、こうした悪影響を除去するための手段としての道路の建設整備、交通安全のための設備に必要な費用を計算し、自動車一台について二百万円を負担させよと説いている。百万円の自動車には、三百万円を支払わせよというのだ。それによって自動車が与える社会への迷惑代を支払わせよ、という計算だ。

こうした考え方は、従来、厚生経済学が主張してきたところだ。工場の製品はその工場内生産費用の他にエントツの煤煙で附近を汚すことが多いとすれば、その住民の干し物の洗濯代を工場者に負担させなければならないと主張する。考え方としてはそういったことであって、私的企業の費用、いわば個人的費用に対して、社会という立場からみてのその生産に必要な費用すなわち社会的費用を考えなければならないという当然な主張だ。

このような主張が世論化し、現実化すれば、物の価格は工場内費用できまるという「法則」は変ってしまう。しかし「社会」の立場に立って計算されるということになれば、もう一つの重大な側面を考えねばならないことになる。

協同体のなかの私的計算

クロポトキンは、共産主義のある酵母なしには現代社会は存在することはできない。商業制度のために人心が利己的傾向に歪められてしまっているにもかかわらず、なお共産主義的傾向はたえず現われて、種々な方法でわれわれの活動に影響している。昔、橋銭をとった橋も、いまは公有となって無料で通行できる。道路も無料博物館、図書館、公園、庭園も万人に開放されている。「必要なだけとれ」という主義は、いたるところにある。近距離でも遠距離でも同じ料金の郵便などの例をクロポトキンが挙げているが、個人や団体の努力や才能の果実を無料で、エンジョイできる機会はいたるところにある。〝社会のおかげで〟われわれの生活に貢献をえていることは数えきれない。企業内の生産努力も所詮、社会、協同体のなかでその恩恵によって成立している。

また、過去の人びとの努力をわれわれは無料でエンジョイしている。無数の人びとの労働の成果を今日の社会がうけついでいる。それに対して空気のように無意識にエンジョイしている。無数、無名の人びとの犠牲や努力が現代をつくり上げている事実の上に、われわれはアグラをかいている。これが協同体のなかの個人の生活なのだ。工場のなかでどれだけの時間の労働がついやされたかで値段がきまるという個人主義的計算は、それが現実の法則であっても、不合理な現実法則であり、社会的計算を現実に迫られている現実である。

摩擦の時代

スミスが労働価値説を主張しようとしたとき、彼は「社会」が構成されていない原野のなかの未開人の鹿とビーバーの交換を設定した。リカルド、マルクスにいたってもこの個人主義的な、社会協同体とは無関係な私的エゴの交換という発想を離れてはいない。社会的交換ということばがあっても、実は協同体のなかの個人としてとらえてはいない。しかし、今では企業の私的費用でなく社会的費用の立場から、社会的な価格が要求される。百万円の車に二百万円余分に支払うことで、協同体の迷惑代としなければならない。協同体のなかでの価値計算でなければならない。マルクスの時代でも、社会的費用において価格が計算されねばならなかった商品は多かったはずであるが、それが工場内での労働量だけで価格がきまるという労働価値説は、社会がそのような社会性を無視できた時代、あるいは社会性の要求がつよくなかった時代であったというだけのことである。社会性、協同体性

無視の現実に即応した価値法則であるわけだ。「文化交流」や「文化蓄積」の稀薄な低開発国から交流、蓄積の多い発展社会となるにしたがって、協同体の貢献が大きく個々の私人の行為にひびいてくる。

個人エゴの社会であるが、協同体性なければ存立、発展はない。そのなかで私的エゴの計算によって行動する不合理が、だんだんに社会の自覚に上ってくる。協同体のなかのエゴの摩擦が激しくなり、紛争の輪と深度をひろげてきているのが現状だ。エゴとエゴとが調和して全体が発展するという資本主義の発想は、もはや過去のものとなっている。私的企業に無数の社会的反発が現実であり、暴力によって私的エゴを押し返えさねばならぬ、といったような矛盾の絶頂が今日の状況になっている。入浜権を、私有権にぶつける運動が出てきている一例のように、所有制否定の事実は、ますますふえてきている。資本主義は競争で発展したといわれたものだが、この発展にはメリットもデメリットも同居していて、エゴのアナーキーの摩擦の火花があまりにも激しくなるにつれてはじめからエゴなき協同体として出発していたなら、発展は資本主義制度におけるものよりもはるかに大きいものであっただろう、の推測を確実なものとしてきたのである。

進化について　その1

三浦精一

リベルテール読書会でクロポトキンの相互扶助論の輪読をしていることについては前に書いた。小人数だがみのりの多い会である。第一章を読んだ吉葉君が、クロポトキンの用語として「進化」と「進歩」が概念的に混同されていると言い、第二章のときに、今野君が「進化」と「遺伝」について、はたしてそれが相互扶助とどう関連しているのかと疑義を出した。そして遺伝するのは突然変異によるというのが今の定説になっていると語った。若い日に相互扶助論を読んで感激した記憶、そして学校で生物学の時間に、教授の名はもうおぼえていないが、メンデリズムやミュテーション　セオリーを教わって、この未知の世界をかいまみた記憶があるだけの僕にとっては、こうした若い人たちの発言は、僕自身に一層の勉強を要求するものであった。

以下は僕自身の早急な勉強によってまとめたものである。僕以上のレベルにある人たちには別に用もなく無益かも知れないが、僕の程度の人たちには参考になるだろうと思う。そして始めから脱線を予定し進化論を次回にまわし、階級の問題に触れることにする。

×

日本で「進化」というとき、主として生物の形体性情の、簡単なものから複雑なものに、同種から異種へと発達変化すること、としてしか用いない。この進化という語は、英語ではエヴォリューションである。エヴォリューションの語義は「展開」または「発達」の過程で、アメリカの人類学者ウィリアム　ハウエルはその人類学の本の中で≪語としてのエヴォリューションは「発達」と「展開」の両義をもち、もっとも簡単に「変異をともなう出自」と定義されている。≫と言っている。そしてこれが生物学的に使用される時に、われわれの言う進化という意味になる。ここで「発達」と訳した語はデヴロプメントで「発展」とか「開発」とも訳される語で、「進歩」の意味の説明の中にもデヴロプメントが用いられている。ということは、日本人が「進化」と「進歩」をわけて考えるとき、英語国民は包括的に考えているということである。したがって、エヴォリューションが、劇の展開、ガスの発生、機械の回転、というときにも用いられることも考えねばならない。

だから、クロポトキンが≪結びつき方と競争の避け方とを、もっともよく弁えた種が生き残り、一層の前進的発達（プログレシヴ　デヴロプメント）をとげる最上の機会をつかむことを知った。≫というとき、この前進的発達という言葉の中には、単に進歩的に発達するというだけでなく進化の概念を含めていることがわかる。

日本語に訳されて常用され、定着している言葉の中には、このように原語がその国で使用されている意味とうまく重なり合わず、首をひねらずには居られないものがある。そうしたものの一つに「階級闘争」がある。これはもともとクラス　ストラグルの訳であることは誰でも知っている。そして分ったような顔をしてマルクス主義の革命的言辞をかつぎ出して、大衆団交の名をかりて粗暴にふるまって革命家気取りをするのだが、その実、日本の組合は欧米で唾棄する会社組合で、いくら乱暴してみたところで社会革命にはつながらず、ストライキも単なる待遇改善のためでしかない。待遇改善だったら、心がけ次第では経営者にもなれるのだから、上手に立ちまわって出世する方が良いという者もあり、なかなか足並がそろわない。やっと足並がそろって賃上げの妥結にこぎつけたと思ったら、欲張る奴がいて左翼的言辞を弄して、もっとストを続けろと言い出して組合を破滅に追いこむこともある。

日本的経済構造の中では、小企業の経営者たちは大企業の下請けとして大会社の労働者にこき使われもする。

大会社のストには協力を強制され、小企業の労働者のストは大会社の組合が支持してくれないばかりか圧殺されることもある。こうした中で「階級」とは、そして革命的組合とは何かと、考えざるを得ない。マルクスは階級として、生産手段の所有者と非所有者に分けている。ロシアでは革命によって資本家がいなくなったから、もう階級は存在しないという。言葉というものは全く重宝なものだ。資本主義制のもとで、いつも苦しんでいる農民は生産手段として土地も農機具も持っている。農民は資本家だろうか。ロシア革命後生産手段は国家がにぎった。国家は資本家ではないのか。それに階層的官僚階級があり、共産党の領袖の内、警察力を手中に入れた者が最高の座にすわる。これが労働者と称し、プロレタリアと称する独裁者である。政経非分離のたてまえで、経済権力もその手中にある。沿海二百海里を設定して他の諸国家と折衝する国家元首である。階層的軍人階級もあり、学者階級、農民階級、労働者階級、職人階級、上層階級、下層階級もある。共産党員でなければ支配階級にはなれない。ロシアでなくなったのは皇帝とそれをとりまいた貴族階級だけである。こうならべてくると、あらためて階級とは何かと聞きたくなるだろう。階級と階層とは重なり合い、時には混同して使用されている。役職の上進を階級が上がるとも言い、支配階級というときと知識階級というとき、その範囲の含み方が同じではない。階級闘争というときの階級とは一体何であろうか。

バクーニンもクロポトキンもロシアの旧貴族の身分をすててヨーロッパを流浪した。クロポトキンはフランスで生活したかったようだが、その夫人（鉱山主の娘）はイギリスで居心地が良かったために、イギリスから動こうとしなかったと聞いている。クロポトキンはイギリスではプリンス・クロポトキンと呼ばれていた。アナーキストだったハーバート・リードもサーとなって貴族の仲間入りした。イギリスには王家を中心に上層階級があり下層の階級とは厳然たる差別があり、労働党がいくらジタバタしてもどうにもならない因襲が支配している。フランスでは大革命の後第三身分が進出し、王も貴族も今は存在しない。だがそこにもイギリス程でなくても因襲的な階級差が存在していると言はれる。サンジカリズムが革命的と言はれるのは、こうした眼に見えない横構造の支配体制の革命を目指すからである。タテ構造の日本の組合運動の中にサンジカリズムが成長せず、タテ構造の上部を横断する総評一家や同盟一家が巾を利かすのも無理のないことである。

階級の概念についてこんなに長く書いたのは、輸入語

として定着していても、その言葉が用いられていた社会的背景とは別に使用されるからである。しかしこれは社会構造が異っている以上やむを得ないし、あたりまえとも言える。だからせめてそうした社会構造の中で生れた「階級闘争」が、もともと持っていた意味ぐらいは把握すべきだと思うのである。すなわち横構造の強い歴史的、因襲的な、表面的には分らない、社会的な階級を含めての社会革命を目ざすものとしての階級闘争、労働運動の概念を把握すべきだというのである。こうした社会構造があるからこそ,アメリカの黒人差別の執拗さも、南アフリカのアパルトヘイトも、オーストラリアの白豪主義も存在するのである。クラスという言葉の意味は実に広い。種類、等級、階級、学級、授業、綱（生物学の）などがあり、クラス　ストラグルというとこのクラスは二つ以上のクラス（複数）で、単数形をとっているのはストラグルの形容語になっているからである。岩佐老人もこのクラスがいろいろな意味をもつことを言っている。言葉が真に表現している意味を捕えようとしたのだろう。大杉にすすめられて訳したもので、岩佐の山賊論と言われアナーキストの組合運動に打撃をあたえたとして攻撃されたが、経済闘争に重点がおかれがちの組合運動への常識的な警告に過ぎない。八太のサンジカリズム否定論の方が暴論である。

スペインその他でアナーキストの労働運動が革命的なのは、横構造の支配体制を突き上げて解体を要求するからである。日本が後進国として、西欧社会での用語を翻訳して使はねばならず、一旦訳すると訳された漢字の意味によって考えるだけで、その言葉が西欧社会で持った意味から外れることがあるのは止むを得ないことだが、矢張り、その社会構造の中での意味も共に考えるべきだろう。前に言った西欧社会に存在する目に見えないが、それでも強く社会を支配しているものを日本で探すと、日本人の未解放部落に対する偏見、天皇制に対する奴隷的偏見などがある。資本家階級の団体も戦後政府と密着して横のつながりを強めて来ている。われわれが考えねばならないのは、こうした縦軸の強い日本の社会構造の中での階級というもの、そして階級闘争というものの意味と在り方である。

告

編集陣に坂入純二君の参加を受けました。〝海外だより〟その他、同君の意向と才能が発揮されましょう。

なお参加ご希望の方は会までお申し出下さい。